

第122回銀行業務検定試験

「財務3級」「法人融資渉外2級」「法人融資渉外3級」団体最優秀賞受賞
「法務3級」「財務2級」団体優秀賞受賞

商工組合中央金庫(商工中金)

「人を思う。未来を思う。」

お客様とともに成長し、お客様の長期的な企業価値向上を目指して

今回は、去る6月3日に実施された第122回銀行業務検定試験「財務3級」「法人融資渉外2級」「法人融資渉外3級」において団体最優秀賞を受賞、「法務3級」「財務2級」において団体優秀賞を受賞されました株式会社商工組合中央金庫へお伺いしました。

株式会社商工組合中央金庫(商工中金)は、中小企業等協同組合その他主として中小規模の事業者を構成員とする団体およびその構成員に対する金融の円滑化を図ることを目的として、昭和11年に商工組合中央金庫法にもとづき政府出資の協同組織金融機関として設立されました。平成20年10月からは株式会社商工組合中央金庫法にもとづく特殊会社に転換し、政府、中小企業団体およびその構成員の出資による金融機関として、全国100店舗、海外3店舗を展開しています(資本金2,186億円、従業員数4,120人、預金3兆8,307億円・譲渡性預金371億円・債券5兆3,442億円。平成24年3月31日現在)。

今回、快く取材に応じてくださいましたのは、人事部研修室の主任調査役鈴木庸寛さん、調査役武田尚任さん、矢野ひろみさんです。

●団体最優秀賞・団体優秀賞の受賞について

今回は、財務3級、法人融資渉外2級、法人融資渉外3級の団体最優秀賞を受賞するとともに、法務3級、財務2級については団体優秀賞を受賞しています。

団体最優秀賞受賞、団体優秀賞受賞について、感想をお伺いしたところ、「当金庫では、銀行業務検定試験を金庫職員の知識の習得度合いを測る重要な試験として考えています。いずれも銀行業務の根幹をなす試験種目であり、今回複数の種目で同時に団体最優秀賞・団体優秀賞を受賞できたのは金庫職員が試験合格に向けて一生懸命努力した結果によるものであり、とても喜ばしい」とおっしゃっていました。

●銀行業務検定試験を積極的に推奨

商工中金では、銀行業務検定試験の大半の試験種目を団体受験扱いで受験するとともに、職員の業務知識の習得度合いの判定基準として採用しています。また、一部試験種目の合格については、昇進・昇格の際に必須とされています。

法人営業に従事する総合職については、法務3級・財務3級の合格を入庫後2年目までに、法務2級・財務2級・外国為替3級・税務3級は入庫4年目までに合格することが求められています。そのほか法人融資渉外2・3級についても業務スキルの拡充に合う試験種目として推奨しているとのことでした。

●日本の中小企業を支えるという使命

日本経済の基盤を担う中小企業の皆様の金融面から支援する、それが設立時から変わることのない商工中金の大きな使命となっています。そこで求められる役割は全国7万社を超える取引先の中小企業との間に長期・安定的な関係を築き、金融を核とした様々な支援を展開し、成長を支援することにあります。

「われわれの強みは、設立以来70余年にわたり、中小企業の皆様の成長をずっと支援してきたことにあります。そこから脈々と受け継がれてきている中小企業経営への深い理解とそれにもとづく長期安定的な取引スタンスが他の金融機関との違いであります。外部環境の急変により中小企業の皆様が困難な状況の時には、中小企業向けに唯一法定された指定金融機関として存在感を発揮していくという使命もありますが、われわれの強みの源泉はこのスタンスから築かれています」とおっしゃっていました。

●徹底した基礎教育による人材育成

商工中金の人材育成においては、取引先を担当する営業窓口(総合職)の基礎教育を徹底的に行っています。入庫から4年間は基礎教育期間として位置付け、1年目は「基礎知識」、2年目は「基礎スキル」、3・4年目は「実践力」をキーワードに集合研修、自己啓発、OJTを有機的に組み合わせた育成体制を敷いているとのことでした。

1年目は年間3回の集合研修と毎月の「テレビ研修」、3科目の必須通信教育(「法務」「財務」「外国為替」)、2年目は年間2回の集合研修と「テレビ研修」、2科目の必須通信教育(「不動産」「税務」)、3年目以降も毎年必ず集合研修を実施し、全国展開する商工中金の営業窓口が質の高い安定した金融サービスを展開できることを目指しているそうです。

また、総合職は入庫2年目から営業窓口配属し、早い段階から責任を持たせ、実践を通じて鍛え上げているとのこと。これを支えるために入庫2年間は職場の先輩職員がマンツーマンで指導を行う「指導員制度」を設け、きめ細かいOJTを行うことで、基礎教育期間を経て一人前の営業窓口として独り立ちすることを支援しているとのことでした。

●職員一人ひとりが「商工中金の顔」になる

最後に、商工中金が求める人材像についてお伺いしたところ、全国の中小企業を支えるために、職員一人ひとりが誰一人欠けることなく「一人前の営業窓口」として「商工中金の顔(代表)」となってもらわなければならないとのことでした。

「ワンストップ・プラットフォーム体制を敷く商工中金では、お客様のニーズに対してはすべて一人の営業窓口(担当者)が対応しています。お客様と接する機会が最も多いこの「営業窓口」が、お客様を第一線で支える存在です。この営業窓口が商工中金の顔(代表)であるとお客様に認められた時、私たちは中小企業を支えるという使命を果たせたと言えるのではないのでしょうか。営業窓口には専門知識を持つと同時に、お客様の事業に懸ける想いにも心を寄せ、様々な悩みに手を差し伸べ、一緒になって解決を目指すことのできる担当者に成長してもらいたい」とおっしゃっていました。

(お忙しいなか、取材に真摯にご対応くださいました鈴木さん、武田さん、矢野さんに心から感謝申し上げます)



▲人事部研修室 鈴木庸寛氏(右)、武田尚任氏(左)、矢野ひろみ氏(中)